’19

後期日程

小論文

（社会情報学部）

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は１冊（４頁），解答用紙は２枚，下書用紙は２枚です。落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで，後の問いに答えなさい。

「考えろ！」とひとはいう。今日，思考することの価値を否定するひとはいない。思考するのはよいことであり，よく考えるひとは立派なひとであり，そのようなひとに名誉や地位や財産が与えられるのは当然である……。何ごともマニュアル化され，情報化によって簡単に知識が検索できるこの時代ですら，自分で考え，情報に惑わされずその真偽を正しく判断することが重要であると，ひとびとは語りあっている。

パスカルのあまりに有名な言葉，「人間は考える葦である」(『パンセ』…(中略)…)——人間は生物としては葦のようにか弱いが，思考することによって偉大である。もし思考しないでいるとすれば，ちょっとした嵐によってなぎ倒され，ちょっとした毒ガスによって枯れ果ててしまうだろう。かつてロダンの「考えるひと」を見たとき，そうした考える人間の崇高さが表現されているように感じたものだった。

とはいえ，「考える」ということで思い浮かんでくるイメージは，そこからすぐにあらぬかたへと反転する。よくいわれるように，有名大学を出たひとが「よく考えるひと」なのか。小中高とたえずテストを受けさせられ，それによい点を取れたひとが入試偏差値の高い大学に行けるのだが，そのようなひとたちが世間で出会う諸問題，とりわけ考えなければ決して解けないような難問に直面して，はたしてそれを解くことができるのか。

テストとは，正解があってそれを求めるものである。だがテストには出しにくい，正解がひとつに定まらない問題がある。世間で出会う大多数の問題は，まさにこの，テストには出しにくいタイプの問題なのではないだろうか。

企業が有名大学の卒業生を採用するのは，——あたかも温度計が室内の暑さ寒さを教えるように——，偏差値が思考する能力の指標になると信じられているからなのであろう。はたしてそれは本当か。正解を出すことのできる技能は，思考する能力とおなじものなのであろうか。かえって思考することと対立する技能かもしれないということはないのか。

文部科学省もいわゆる①「考える教育」をさせようとするわけだが，そんなプログラムはことごとく失敗する。そのわけは，自発性が強制できないからである。思考することは，「逆らって進む」ことである。世間の常識やおとなたちの説明にあえて逆らっ

て，自分で判断しようとすることである。しかし子どもたちは，考える能力をではなく，教育現場での，考えているかどうかの指標を表現する能力の方を身につける。子どもたちは発見するよりも発見するふりを学び，自分の意見をいうよりも意見をいうふりを学ぶ。思考は自発的でなければならないのに，子どもたちは考えているふりをするだけなのだ。

文部科学省が望む真に思考する子どもたち――それは思考を余儀なくされるような状況のなか，まさに教育の失敗や，あるいは家庭の不和や社会の問題といった状況のなかから育ってくるものではないだろうか。そしてまた，真に思考する子どもたちは，真に思考するおとなとの出会いによって，思考するやり方を身につけていくものなのではないだろうか――思考するおとなと出会えなかった子どもたちは不幸である。

だからもし，啓発セミナーのようなところで「みずから考えよう」などといわれたならば，分かったふりをしたりはせずに，「考えるとはどのようなことか」と，本当に考えてみてほしい。われわれがしている思考は，随分と曖昧な，怪しげなものである。「考えよう」といわれても，思考を意志することは困難であり，「考えろ！」といわれてひとがすることは，しばしば思考とは呼び難いものだったりする。

「考える」という行為に対して，ひとは，記憶を呼び起こすことや，想像することや，リストや表や図を作ることや，手段を見出だしたり対策を講じたり手順を決めたりすることや，あるいは言葉を秩序づけて作文することや，あえていえば伝聞を自分の言葉にすりかえることや，紋切り型の口調を唱えること，さらには「想う」という表記までを含めると，反復して意識するだけのことをも含めてきた。何をもって「思考する」というのか，国語辞典でどう説明されていようと，まったく曖昧で怪しげである。

アリストテレスが人間を「思考する動物」と定義しているが，人間の本質を「思考すること」とする理由は，進化論的に説明するなら，思考によって他の生物たちに喰われたり，他の生物に食糧を横取りされたりすることがなかったという意味になるであろう。他の生物たちが鋭い牙や強い顎をもっていたり，敏感な嗅覚や視覚をもっていたりするのに対して，相対的には無能であるにもかかわらず生き残ってきた理由であるとされるだろう。

なるほど危険を回避すること，食物を確保することに関しては，よく思考するひとの提案を聞くことで，より安全になったり空腹を癒すことができたとは，いかにもありそうなことである。今日でも災難に備え，生活条件を整えるためには，いろいろと思考しておかなければならないが，そのような準備をすることをもって「思考する」というとしたら，簡単にいって，お金もしくは収入源を確保することに長(た)けたひとが，よく思考するひとであるということになるであろう。だが，それは他の生物たちとどのように異なることなのか。骨を庭陰に埋めるイヌや，蜜を貯めて人間に搾取されるハチと，どのように異なることなのか。

よく考えてみると，われわれは，「考えろ！」といわれながら育ってきたのだが，何をもって考えるとするかは教えられてはこなかった。個人差があるようにも見えるし，評価する基準も曖昧である。それをどのようなこととするかによって，評価が正反対になってしまうことだってあるだろう。

それにもかかわらず，ひとびとは「考えろ！」と，互いに声かけあっている。

いたるところ――サラリーマンであれ，子どもたちであれ，年金生活者であれ，主婦であれ，だれもどこかで「考えろ！」といわれている。女性に対しては，前近代の名(な)残(ご)りのあるところではしばしば「思考してはならない」とされたものだったが，いまはもはやそれはない。いつでもどこでも「考えろ！」――そのようにいうひとがつねにあなたの傍(かたわ)らにいる。

あなたは本当に思考しているか？――「考えろ！」とひとにはいいながら，その実，②たいして考えてはいないのではないか。こちらが問いを発しただけで，激昂したり，無視して忽然とどこかへ消えてしまったりはしていないか？――「考えろ！」という社会的圧力はあまりに強い。それほどひとは考えていないということか。

（船木亨『いかにして思考するべきか？――言葉と確率の思想史』勁草書房　2017年，より。ただし本文に下線①と下線②をほどこした。また一部を省略した。）

問１　下線①「考える教育」をさせようとするわけだが，そんなプログラムはことごとく失敗する，と著者が主張する理由を，本文の記述を踏まえながら，説明しなさい。（300 字程度）

問２　下線②あなたは本当に思考しているか？という問いに対し，今のあなた自身はどのように考えてどのように答えますか。本文の叙述を参考にしながら，述べなさい。（700 字程度）